

自閉スペクトラム症児の母親へのアタッチメントと 集団療育場面における他者との関わり

前田 早紀

【背景・目的】アタッチメントとは、子どもが恐怖や不安に陥った時に特定の大人に接近・接触することで安心を得られる絆のことであり、子どもが特定の大人と安定したアタッチメントを形成することは、その大人を安全基地としての活発な探索行動を可能にし、後の良好な対人関係を形成する基礎となる。自閉スペクトラム症（以下、ASD）児は、対人関係やコミュニケーションに質的な障害を示すことから、アタッチメントの形成は困難であると考えられてきたが（Rutter, 1978）、現在では、ASD 児も安定したアタッチメントを形成することが可能であるということが示されている（Rutgers et al., 2004）。しかし、ASD 児のアタッチメントは、その質や形成プロセスが定型発達児とは異なるとの指摘があるにも関わらず、ASD 児においても、母親へのアタッチメントの安定性が母親以外の他者への行動に影響を与えるのか検討した研究は少ない。本研究は、ASD 児の母親に対するアタッチメントの安定性が、通園施設での集団療育場面における保育士や他児との関係性や行動に及ぼす影響について明らかにすることを目的として行われた。

【方法】対象児は、A 児童発達支援センターに通園しており、かつ、大学内で個別に行われた療育に参加した ASD 児 9 名（男児 8 名、女児 2 名）であった。母親へのアタッチメントについては、20××年 10 月から 11 月中旬にかけて大学で行われた個別療育を通じて観察を行い、アタッチメント Q 分類法（以下、AQS）（Waters & Deane, 1985）を用いてアタッチメントの安定性得点、依存性得点、Howes & Ritchie (1999) をもとにした 5 つの下位尺度の得点をそれぞれ算出した。集団療育場面における他者への関わりに関しては、通園施設にて、全クラスの子どもが参加している、プレイルームでの自由遊び時間に、スキャンサンプリングと個体追跡サンプリングを用いて観察を行った。スキャンサンプリングでは、近接している相手と関わっている相手を記録した。個体追跡サンプリングでは、対象児の対人/対物的な行動について予備観察によって作成された行動カテゴリをもとに、サンプル間隔 10 秒の 1-0 サンプリング法で行動の生起の有無を記録し、各行動カテゴリの生起率を算出した。

【結果と考察】AQS のアタッチメントの安定性得点を算出したところ、AQS における安定型の基準値である 0.3 以上の安定性得点を示す対象児はいなかった。その理由として、本研究の対象児は、アタッチメントを形成できる段階まで発達年齢が発達していない、または、ASD の障害により安定したアタッチメントを形成できなかったため、結果として、全員、安定性得点が基準値よりも低くなってしまったと考えられる。集団療育場面での保育士を含む大人との関係性・相互交渉と AQS におけるアタッチメントの安定性得点の間に直接の相関は見られなかったが、母親へのアタッチメントの安定性得点は、「大人に接近する」行動を説明していることがわかり、母親へのアタッチメントが、母親以外の大人に対する行動にも影響を与える可能性が示唆された。さらに、アタッチメントの安定性得点とは別に、Howes et al. (1999) の下位尺度をもとにして分類したアタッチメントタイプ、愛着恐怖型・安定型・愛着軽視型の 3 群の集団療育場面における大人との関係性や相互交渉の特徴について検討した。その結果、愛着恐怖型は、集団療育場面で大人への依存傾向が強く、愛着軽視型は、大人から離れて活動することが多く、安定型は、大人を安全基地として利用することが集団療育場面でも上手くできている可能性が示唆された。（比較発達心理学）